

博士論文（要約）

戦後思想史のなかの大江健三郎

——「評論」と「小説」の相互関係に注目して——

北山 敏秀

本論文では、一九五〇年代後半から一九七〇年頃までに発表された大江健三郎（一九三五 - ）の小説や評論を分析の対象とする。

大江は一九五七年に小説家としてデビューして以降、徐々にエッセイなどの評論を発表する機会も増えていく。それにもなつて、六〇年安保に代表される一九六〇年前後の政治状況のなかで、自らを「戦後世代」として位置づけ、日本国憲法を土台としながら、《主権在民》、《戦争放棄》を基本理念とした言論活動を展開した。しかし大江は、一九六三年には広島に被爆者と出会い、一九六五年以降の沖縄訪問では、新川明などの、抑圧されてきた沖縄の歴史を鋭く問い直す人々と出会うことになる。そうした経験を通して大江は、「民主主義」や、その土台となる「憲法」の価値を強調してきた自らの言説が、それらの〈周縁〉化され、差別される人々を視野の外に置くことで成り立っていたことを自覚していく。その過程として書かれたのが、たとえば『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五年六月）や『沖縄ノート』（岩波新書、一九七〇年九月）であり、あるいは、〈周縁〉を物語の場所にしながら、その土地の歴史に深く想像力をめぐらす人々を描いた『万延元年のフットボール』（講談社、一九六七年九月）であった。本論文では、そうした大江による「戦後世代」としての自己の位置づけと、それにもなつて紡がれた言説を大江自身が相対化していく過程を分析することで、この時期の大江文学の展開を明らかにする。

その際、「評論」と「小説」のどちらをも分析対象として優位に置くことなく、評論における政治的主張と小説表現との相互関係に留意することで、この時期の大江の言説を、より総合的に戦後思想史の問題として位置づける。

相互関係といっても、「戦後民主主義」を語る評論と、「戦争」や「天皇」を美化する主人公を描く小説といったように、両者を対立的に捉えたいうえで、その関係性を論じるということではない。むしろ本論文では、評論もまた、同時代の社会的・思想的状況のなかで構築された言説として捉え、評論自体を葛藤を含んだ言説として分析対象に据える。評論を分析することで見えてくるものとの関係性において改めて小説を読み直していく、また、小説を分析することでこれまで重視されてこなかった評論の言葉に新たな光を当てる、というのが本論文の方法である。

具体的には、以下のような順序で論述を進める。

第Ⅰ部「『世代』論の運動」では、デビュー間もない一九五〇年代後半から六〇年安保前後にかけての大江の言説に焦点を絞り、「戦争」をめぐる当時の社会的な思想状況との関係性のなかで行なわれた、大江による「戦後世代」としての自己の位置づけの様態を問う。

第一章では、大江のエッセイや談話記録のうち、特に《玉音放送》を「民主主義」をもたらした断絶の時点として語ったものを取り上げ、分析を施す。第二章では、橋川文三による「戦争体験論」と比較しながら、大江による「戦後世代」としての表象を、いわゆる「戦中派」とのあいだで相互に行なわれる「世代」的な自己主張のなかで構築された言説として相対化する。さらに、第三章では、まだ大江がエッセイなどの評論を発表するまえの時点で書かれた小説「飼育」（『文學界』一九五八年一月号）を扱う。時間的な順序で言えば、本論文で扱う作品のうち、「飼育」が最も早い時期に書かれたものである。しかし、本論文の全体の目的が、エッセイを通じた大江による「戦後世代」としての自己の位置づ

けが、その後の大江の表現にどのような展開をもたらしたかを論じることにあるため、論文の入り口である第一章には、上述の論点を置いた。そこで第三章では、比較的早い時期に書かれたこの「飼育」が、「戦争」と自己との関係性を認識することをめぐる、「世代」的なアイデンティティの獲得の困難そのものを描き出していることに注目した。それによって、一九六〇年前後の評論における大江の「戦後世代」としての自己の位置づけが、六〇年安保前後の社会状況との関わりにおいてこそ実践されたものであることを、別の角度から改めて提示する。

第Ⅱ部「〈周縁〉から問う」では、第Ⅰ部で検討したような、大江が「戦後世代」としての自己の位置づけに関わってそれまでに提示してきた言説を、大江自身が他者との出会いを通していかに相対化していくのかを問う。大江は一九六〇年代の作品で、障害を持つ子供の誕生や、広島の子供たちとの出会いなどを通して、高度経済成長を謳う一九六〇年代の日本社会において〈周縁〉化される人々に目を向けるようになる。第Ⅱ部は、それらの作品を書くことを通し、国民に主権を置く戦後の民主主義を評価してきた自らの認識を、大江自身が捉え直そうとする過程を問題にする。

第四章では、「人づくり政策」など、成長・発展が重視される政治状況のなかで、障害を持つ子供の誕生と向き合うということの問題化した小説として『個人的な体験』（新潮社、一九六四年八月）を扱う。第五章では、原水爆禁止運動をめぐる政治的喧騒に押し隠されようとする被爆者の生と死の営みを、「被爆者」を一括して描き出してしまうことへの自己批判を含めながら捉えようとする『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五年六月）を扱う。さらに、第六章では、六〇年安保によって精神的な傷を負った者たちが、場所を〈地方〉へと移し、その土地の歴史への想像力のもと、権力によって抑圧されてきた民衆の姿を深く問い直そうとするさまを描き出した小説として『万延元年のフットボール』（講談社、一九六七年九月）を扱う。

それらを通して、社会的に〈周縁〉化された位置から、社会の主流にある言説を、また、「民主主義」を享受し、その価値を訴えてきたという点ではやはり「戦後」の社会の主流にある自己を問い直そうとする、大江の表現の様態を分析する。

第Ⅲ部「連続する「天皇制」」では、大江が「天皇制」の問題をいかに表現していたのかを分析する。第Ⅰ部で検討したように、大江は、国民に主権を置く戦後の民主主義の価値を訴える立場から、自身を「戦後世代」として位置づけた。そして第Ⅱ部で検討したように、〈周縁〉化される人々との出会いを通して、「国民」の境界線を問い直しながら、大江は「民主主義」を支持する自己の言説を相対化していった。同時に大江は、戦後日本の「民主主義」を不安定にする根幹の問題として、「天皇制」にも目を向けていく。大江における「天皇制」への問いは、デビューからおおよそ三年後の、二五歳で書かれた「セヴンティーン」「政治少年死す」の時点で、すでに実践されていた。したがって第Ⅲ部では、まずは「セヴンティーン」の時点へと遡り、「天皇制」という根幹にある問題に対する、大江の表現の展開を検討していく。

第七章では、一七歳の右翼少年によるテロ事件を背景に、犯人である山口二矢に対する共感の可能性も意識しながら書かれた「セヴンティーン」「政治少年死す」（『文學界』一九六一年一、二月号）を扱う。第八章では、絶対的天皇制のもとでの同化政策の帰結として

「捨て石」にされ、沖縄戦において苛烈な戦闘の場となった沖縄で、大江が「本土の日本人」としての自身の権力性を問い直そうとした過程を示す『沖縄ノート』（岩波新書、一九七〇年九月）を扱う。さらに、第九章では、「セヴンティーン」二部作に続く小説として大江自身に意識され、一九七〇年十一月の三島由紀夫割腹自殺事件のあとの時期において、改めて自己と社会に内在化された「天皇制」を問題化しようとした「みずから我が涙をぬぐいたまう日」（『群像』一九七一年一〇月号）を扱う。

それを通し、戦後において連続する「天皇制」を、「民主主義」を不安定にする根幹の問題として、さらには、戦後を生きる日本人としての自己にも内在化された問題として描き出そうとした、大江による表現の様態を分析していく。

以上、本論文では、大江の言説における、「戦後世代」としての自己の位置づけと、その相対化の過程に注目しながら分析を進める。その相対化の過程とは、戦後における《主権在民》や《戦争放棄》の理念が持つ価値を訴えるなかで、自身の言説の外にこぼれ落ちてしまう人々の声を拾い上げようとする試みとして現れるものであった。その視点は特に、『沖縄ノート』を論じる際に問題にする「沈黙」という観点として大江の言説に現れる。

「敗戦」に断絶を見、戦後日本の「民主主義」のもとにある「日本人」を新たに構想しようとするとき、その言説が抑圧し、不可視にする部分から、大江はいかに「沈黙」を見出し、「沈黙」する人々の声を拾い上げているのか。そしてその拾い上げられた声はいかに大江の言説にまといつき、響いているのか。本論文では、そうした問題について、大江の言説における「評論」と「小説」の相互関係に注目しながら分析し、大江の言説から見えてくる戦後日本の輪郭を明らかにする。